

《調査報告》 剣道部第四代監督 吉原晋氏 略伝

齋藤達哉

(国際コミュニケーション学部教授)

一、はじめに

吉原晋氏(一九二三～二〇一九年)は、専修大学専門部法科を一九四三年に卒業し、一九七一～一九七六年度に専修大学の剣道部の第四代監督を務めた人物である。吉原監督の在任中に、専修大学剣道部は全日本学生剣道優勝大会で三回、関東学生剣道優勝大会でも三回の優勝をしている。

本稿では、吉原晋氏について、専修大学との接点を中心にした略伝を紹介する。

二、今回の調査の情報源

本稿では、主として次の資料とインタビューに基づき、吉原氏の略伝を紡いだ。

(1) 吉原晋氏の回顧録

吉原氏は、御本人の口述に基づく『大正・昭和・平成の時代に生きて』(二〇一二年・私家版。以下では「回顧録」と称する)を残

している。この回顧録は未完であり、剣道部監督時代のエピソードまでは語られていない。しかし、吉原氏の人生にとって剣道が重要な意味を持っていたことを知ることができる。

(2) 『剣道日本』誌のインタビュー記事

『剣道日本』誌(スキージャーナル株式会社刊)では、二〇〇四年九月号「師の背中」、二〇〇四年十二月号「範士が語る」で吉原氏のインタビュー記事を掲載している。これらの記事からは、剣道に対する考え方を知ることができる。吉原氏の各剣道連盟の役員歴等は、主として『剣道日本』誌の記載に拠った。

(3) 体育会の記念誌

専修大学の体育会が五〇周年を記念して刊行した『専修大学スポーツ記録一九三三～一九八三』(一九八三年、学校法人専修大学。以下では「スポーツ記録」と略す)、『専修大学体育会五〇周年史・人国記』(一九八三年、学校法人専修大学。以下では「人国記」と略す)に、剣道部の記録がある。『スポーツ記録』は、剣道

部の歴代役員および年度ごとの対戦記録を掲載する。『人国記』は、「村岡一刀流」に燃えた学生剣道日本一に輝く栄光」と題した文章を掲載している。

(4) 剣道部OBへのインタビュー

剣道部OBである松下吉進氏、福留文雄氏にインタビューに応じていただいた。インタビューは、二〇二二年二月二〇日、神田キャンパス一〇号館校友ラウンジに於いて実施した。

お二人とも一九六九年の入学。吉原監督時代の剣道部に所属し、三年生の時に関東学生剣道優勝大会と全日本学生剣道優勝大会での専修大学初優勝、四年生の時にも関東学生剣道優勝大会での二回目の優勝を経験されている。

松下吉進氏は、卒業後、警視庁で剣道の指導にあたられ、全日本剣道連盟の理事も歴任された。剣道範士八段で、剣道界に深いつながりをお持ちである。専修大学剣道部の第八代監督も務められ、現在は、剣道部OBで構成される剣道部鳳剣会の会長をされている。

福留文雄氏は、剣道部鳳剣会の事務局長時代には、二〇一五年の世界剣道選手権大会で来日したチリ代表チームと本学剣道部との交流試合の実現に尽力されるなど、現在も剣道部やそのOB会との深いつながりをお持ちである。現在は、剣道部鳳剣会の副会長をされている。

当日は、齋藤達哉と瀬戸口龍一氏（大学史資料室）が聞き手となり、吉原監督の思い出のほかに、当時の剣道部の様子についてもお

話を伺うことができた（以下では「OBインタビュー」と称する）。

(5) 御家族へのインタビュー

吉原晋氏の御家族にお話を伺った。孫にあたられる吉原晋太郎氏には、インタビューに応じていただいた（二〇二四年一月一六日、zoomでのインタビュー）。晋太郎氏からは、その前後にも様々な情報提供を受けた。

また、次男にあたられる吉原俊雄氏（晋太郎氏の御尊父）からも、メールで情報提供を受けた。

三、吉原晋氏の略歴

吉原晋氏は、一九二三年、千葉県夷隅郡夷隅町作田に生まれた。旧制・大多喜中学校を卒業後、一九四一年に専修大学専門部法科に入学している。深川の叔母の家に身を寄せ、税務局に勤務しながら大学に通った。

専修大学を選んだ理由は、回顧録によると次のようなことであった。

当時の大蔵大臣は坂谷芳郎男爵^(ママ)でして、この方が専修大学の総長であり、税務監督局から専修大学までは歩いて行けるような距離で、（税務監督局と専修大学は神保町にありました）お堀端を行けば行けるといような距離にあるといようなことがわかりました。（回顧録一五ページ）

戦時下であったため、一九四三年に繰上卒業となり、出征。開封

で終戦を迎え、上海を経由して一九四六年に復員した（戦地での体験については、回顧録からの転載が『専修大学史紀要』第一五号、第一六号に、瀬戸口龍一氏によって転載がなされているので、ここでは割愛する）。

復員後は、茂原税務署、玉川税務署、下谷税務署、麻布税務署、京橋税務署等に勤務。一九五九年には税理士国家試験に合格している。

一九六七年頃、税務会計事務所を開設。専修大学剣道部の監督に就任した一九七一年は事務所開設の四年後であった。なお、『剣道



写真1 2019年10月の葬儀会場では、愛用の剣道用具（竹刀、防具）、範士称号授与証、軍隊時代に着用された陸軍将校用の外套等が展示された（吉原家提供）

日本』（二〇〇四年九月号、および二月月号）掲載の吉原氏へのインタビュー記事では、監督就任は「昭和四五年」（一九七〇年）となっている。

また、この時期には、剣道八段となっている。吉原俊雄氏によると、史上最年少の八段として新聞

に掲載されたという。

一九八〇年に、長男として家を継ぐために、郷里である夷隅町（現在のいすみ市）に戻った。同時に、推されて町長選に立候補し、夷隅町長を二期八年（一九八〇年四月～一九八八年四月）¹にわたって務めた。

夷隅に居を移してから剣道との関りは深かった。一九八六年に剣道範士となり、夷隅剣道連盟では名誉会長となっている。また、『剣道日本』（二〇〇四年九月号、および二月号）によると、千葉県剣道連盟では筆頭監事を、千葉県少年剣道育成連盟では会長を務めている。逝去時に東京学連剣友連合会の公式ホームページ²では、全日本学生剣道連盟参与、関東学生剣道連盟顧問と紹介されている。

四、専修大学の学生時代

吉原氏の剣道との出会いは、旧制・大多喜中学校においてであった。回顧録には、井上十郎氏（高野佐三郎氏の明信館道場出身）から指導を受けたことや、当時行われていた近隣の学校との対抗戦で三年生からレギュラーを務める腕前まで上達していたことが記されている。

しかし、専修大学在学中の剣道部での活動は、残念ながら詳らかではない。剣道部OBへのインタビューの中で、福留文雄氏は次のように語っている。

在学中の稽古のことは、我々にも、ハッキリとはしてないのですよ。というのは、今年お亡くなりになった斎藤敬基先輩³からお聞きしたところでは、吉原監督は剣道部でも他の学生と一緒に稽古される機会は少なかったようです。

吉原氏は勤労学生であったので、大学で剣道に費やすことのできる時間が多くなかったことは想像に難くない。当時、吉原氏のように税務署に籍を置いた勤労学生の目標は高等文官試験合格であったからである。回顧録では次のように記されている。

（直税課第四係へ）行ったら皆私と同じように青雲の志を抱いて来た、早く言えば苦学生であります。そしてその狙いは、高等文官試験を受けて合格すれば一挙に司税官になり、或いは書記官になれる訳でありますから、当時の高等文官というのは大変な価値があり、それを狙う人たちが集まっていた。これに私は大変刺激をされました。

一生懸命に法律の勉強をして、高等文官試験は専門学校以上の卒業証書を持つていれば受けられる訳でありますので：（回顧録一八～一九ページ）

一方で、回顧録には、剣道の研鑽を積んでいたことがうかがわれる箇所も見られる。

その第一は、中国大陆で予備士官教育を受けた期間に、すでに剣道四段を保有しており、区隊長から「吉原候補生、君が朝の両手軍刀術は指導せ」と言われたというエピソードである（回顧録二九



写真2 現在、生田キャンパスの剣道場に掲げられている歴代指導陣と部員の芳名。昭和18年卒業の吉原晋氏の氏名は、写真の最下段左から3人目に見いだせる。昭和18年卒業の同期には、宮地正二郎氏、海外貞雄氏、佐野義二氏、字引倉勇氏、野村義正氏、村上倉造氏である。（剣道部部长・斎藤実氏提供）

ページ）。

その第二は、上野警察署での思い出の中で、「私は軍隊へ行く時に、堀口先生と言う方に青山警察で指導頂いたことがある」（回顧録八八ページ）と語っている箇所である。これについては、『剣道日本』（二〇〇四年一二月号）のインタビュー記事でも、「青山警察というのは、ぼくが学徒出陣する前に最後に剣道の稽古をしたところで、昭和一八年の、たしか一月中旬でした。」（七八ページ）とある。

こうしたことから、専修大学時代の剣道と

の関りについては、今後の調査の必要を感じるところである。

五、戦後の剣道再開

吉原氏の回顧録では、様々な場面で剣道のことと語られている。吉原氏の人生にとって剣道が重要な意味を持っていたことを知ることが出来る。

周知のとおり、戦後数年間は民間において武道を行うことができなかった時期が続いていた。そうした時期を経て、一九五二年は吉原氏にとって大きな節目となった。下谷税務署への転勤を機に、近隣の上野警察署で剣道を再開する機会を得ることになったのである。このことは、「私の剣道と私の人生の第二の出発点であった」(回顧録八六ページ)と、とりわけ重要な意味をもって語られている。そして、剣道の稽古を始めた場所が「台東区上野」であったことも、吉原氏のその後の剣道界との濃厚な関わり方を決定づけるものであった。回顧録には次の記述がある。

大変私はこの上野警察での剣道との出会い、そして上野警察を中心にした台東区剣道連盟と言うのがその後にくぐってきた。確か昭和二十七年だと思いますが、これがきっかけになって全国組織の全日本剣道連盟ができるようになった訳であります、剣道の戦後の発祥地が上野であったと言っても過言ではないのかなあとこう思います。(回顧録八七ページ)

上野警察は戦後再び竹刀を握った思い出の場所で、終生忘れることのできない所であります。特にこの台東区剣道連盟では、そちこちの連盟が段々できて参りまして、大会等があり、よく選手として私も随分そちこちの各区の剣道連盟の大会に行くようになったのも、ここでの修業(マユ)の場があったということであろうと思います。(回顧録八八ページ)

吉原氏は、一九六七年頃の税務会計事務所開設と同じ頃、東京都剣道連盟の財務委員長も務めている。

六、監督就任の経緯

吉原氏は、上野警察署での稽古を通して、戦後剣道界をリードする人々との人脈を形成していった。『剣道日本』によると、上野警察署では、高野孫二郎氏、堀口清氏、佐藤顕氏から教えを受け、東京都剣道連盟の財務委員長時代には、当時、全日本剣道連盟副会長・東京都剣道連盟相談役であった玉利嘉章氏と知り合い、教えを受けるようになる。

専修大学の剣道部監督就任も、上野警察署での邂逅が契機となっている。福留文雄氏は、吉原氏の監督就任の経緯について、次のように伝聞しているという。

上野警察署へ行ったら、我々の先輩の、千葉の佐野先輩という方がいらっしゃるのですよ。その佐野先輩に道場で会って、「あつ、おい、吉原、おまえ今何をやっているんだ」というこ

とで、「ちょっと後輩の面倒を見ないか」と。その佐野先輩からお声がかかったのです。当時、関東学生剣道優勝大会で三位になっていたのですが、その時の赤壁監督という方が急に亡くなられたのです。それで、佐野先輩が上野警察署で吉原先生に会って、「こういう事情なんだけど、おまえ、ちょっと大学の面倒見ないか」と声をかけて、吉原先生が監督として入ってこられた、というふうに伺いました。

この中に登場する「佐野先輩」とは、佐野義二氏のことである。佐野氏は、吉原氏と同じ昭和一八年に専修大学専門部計理科を卒業している。『人国記』によると、昭和四〇年代当時、剣道部OB会副会長を務めており、「師範」探しにあたっても尽力。中野八十二範士（東京教育大教授）の助力を得て村岡裕氏⁴を招聘している。

また、「赤壁監督」は、赤壁昭二（旧姓・井上）氏のことである。赤壁氏は、昭和二五年経済学部卒業であるが、『人国記』によると、昭和二七年の剣道部再建メンバーの一人でもあった。

砂田卓士氏（法学部教授）を部長とし、OBの尽力によって、村岡師範、赤壁監督という指導陣を整えた専修大学は、一九七〇年度には全日本学生剣道優勝大会で三位に入るまで力を蓄えていた。そうした中での監督急逝であった。

赤壁氏の後任に吉原氏を招聘した理由として、『人国記』の中に引用された村岡師範の回想がある。

当時、専大剣道部は上段の相手に弱いところがあったため、上

段の構えが得意な吉原OBに特に監督就任をお願いした（人国記一六ページ）

と記している。

これについて、吉原晋太郎氏は次のように感想を述べている。おそらく、普段は中段の構えをベースにしていたと思います。祖父は、当時の人の中ではがっしりした体格でした。身長は、一七五センチはあったのではないかと思います。それだから上段もやろうと思えばできたのではないかと思います。つまり、上段対策の稽古で祖父が上段を構えることができたということではないかと思います。

福留文雄氏も同様の見解で、当時の学生剣道界の状況を踏まえて次のように解釈する。

吉原監督は、普段の稽古指導は中段の構えで、指導されておりました。しかし、当時の大学学生剣道界に各校とも上段の構えの選手が出て来て活躍しました。そこで、吉原監督はこれまでの監督の経験、実績などから多彩にまた柔軟に対応出来るように監督自ら上段の構えをして、学生に対応能力（対応技術）向上のご指導をされておりました。

学生剣道は九人の選手を対戦相手校によって、都度ポジションを変えながら対戦します。その際に、上段に強い学生、上段に弱い学生の見分けで選手起用の判断をもされていたと思います。

七、吉原監督在任期間の剣道部

(1) 対戦成績

本学剣道部は、吉原監督在任期間中に全日本学生剣道優勝大会と関東学生剣道優勝大会で、それぞれ三回優勝している。

全日本学生剣道優勝大会では、一九七二、一九七四、一九七六年度に優勝し、関東学生剣道優勝大会では、一九七一、一九七二、一九七六年度に優勝している。



写真3 1972年の第20回全日本学生剣道優勝大会の入場風景。前年に優勝した専修大学が先頭で入場。プラカードから2人目が主将の松下氏。4人目で優勝旗を持つのが福留氏。福留氏の手前の白い服の人物が吉原晋監督。(福留文雄氏提供)

なかでも、一九七一年度は、全日本学生剣道優勝大会と関東学生剣道優勝大会の両大会ともに「初優勝」であった。

(2) 海外遠征

関東学生剣道優勝大会で、一九七一、一九七二年と連覇した専修大学の監督である吉原氏は、一九七二年の暮れに、関東学

生選抜軍の監督として大韓民国に遠征した。

以下では、OBインタビューの中から、遠征当時の様子のわかる部分を紹介する。

(松下氏) 関東学連では、もう何回となく継続して韓国遠征などに行っています。関東学連の中で各大学の代表を集めて行くのです。私は、第一回の韓国遠征に選ばれましたが、そのときの日本の監督は吉原先生が務めました。私どもが初優勝した次の年でした。そういったこともあって、吉原先生が団長になられたそうです。

(瀬戸口) 専修大学からは、何人ぐらい参加されたのですか？

(松下氏) 私だけです。そのほかは、各大学から選抜されての編成でした。

(瀬戸口) なるほど。では、本当に少人数ですね。

(松下氏) そうですね。

(福留氏) 二〇人ぐらいのチーム編成ではなかったですか？

(松下氏) そうですね。そして、釜山、大邱、ソウルと三都市で試合をして回りました。当時の韓国は戒厳令が敷かれていました、日中の試合や行事を終えてホテルに入りますと、戒厳令で外出は禁止でした。窓から外を見たら、もう煌々と明かりだけが灯されており、シーンとしていて、ちよつと異様な雰囲気だったのを覚えています。

(3) 剣道部が強くなった理由

専修大学の剣道部が強くなった理由としては、「近代スピード剣道に合わせた、合理的な練習法を生み出した村岡師範の指導」、「いわば『村岡一刀流』」(人国記二二二ページ)に負うところが大きかったとされている。

村岡師範の就任は一九六九年二月。早くも、一九六九年度には、関東学生剣道優勝大会で二位となり、翌一九七〇年度には、全日本学生剣道優勝大会と関東学生剣道優勝大会でそれぞれ三位になるという好成績を上げ始めていた。赤壁監督の急逝の後を受けた吉原監督は、勢いを失速させることなく、専修大学を優勝常連校に導いている。

OBインタビューでは、当時の専修大学に、高校時代に剣道で好成績を上げた人が集まっていたことが、強くなった理由の一つとして挙げられた。当時、いわゆるスポーツ推薦入学制度はまだない時代であった⁵⁾。

(福留氏) 我々の一つ上の学年がとにかく強かったです。「えっ! こういう先輩が?」と驚くほど全国大会で名を残した先輩が多く、松下さんのPL学園の一つ上で濱崎満先輩⁶⁾という方もおられました。もう一人は、恒次勝利先輩⁷⁾です。旧姓が森で、高校時代は柳川商業の森さんと言えは有名でした。「こういう先輩方が専修にいるんだ!」ということは入学してから知りましたが、高校時代に全国に名が知られた先輩ばかりでした。

(松下氏) 濱崎先輩という方は、当時からお人柄が良く、部員を纏める術に長けており、それがチームワークの良さとなって、良い結果に結びついたのだと思います。

また、一九七一年度の全日本学生剣道優勝大会での初優勝について、松下吉進氏は「地の利」もあつたと回想する。

(松下氏) 今思うと、「地の利」もあつたのかもしれないですね。会場に行ってから、いろいろ着替えて準備運動するのではなくて、神田校舎で体を動かして、それから会場に行って試合でしたので。会場は日本武道館でしたから、そういった面では恵まれていたのかなという感じもします。

吉原氏自身も、「強い優秀な部員」に恵まれていたと感じていたようである。吉原俊雄氏は、父・吉原晋氏について、次のように回想する。

専修の監督を終えた後も、自身の監督時代は本当に強い優秀な学生部員が多く、とても恵まれていたといつも話しておりまして。一番楽しかった時代だったと思います。専修卒業後は警察に行った方も多く、濱崎満氏(警視庁名誉師範)、松下吉進氏(専修大学剣道部前監督)、全日本剣道大会で優勝した石橋正久氏(福岡県代表)なども居られ、父からそれらの事よく聞いていました。

八、学生との接し方

村岡師範のもとで、吉原氏は、どのような監督であったのであろうか。OBインタビューでのやり取りを紹介する。

(1) 物静かな監督

(齋藤) 急な事情で監督が決まったというお話でしたが、この先輩はどなたなのだろうという感じでしたか？

(福留氏) そうですね。最初は我々も全然知りませんでした。どこか先生だろうなあと思っていて。

(松下氏) 吉原監督は、寡黙な方で、激を飛ばしたり、発破をかけたりとか、そういうのは全然なかったですね。

(福留氏) 物静かな監督でしたからね。

(齋藤) 吉原監督は、面倒見という面ではどうでしたか？

(福留氏) 前監督は、我々が一年生の時に亡くなったので、そんなに深く交流がありませんでした。だから比べられないのですが、吉原監督は、面倒見というのは、やはりよかったと思うのです。「ご飯食べろ」、「とにかく腹いっぱい食べろ」と連れられて行つて。そうやって学生の面倒を見ていただきました。

(松下氏) そういう華やかさですね、吉原先生は。全日本の大会前は、専修の学生を呼んでいたいて、激励会をやっていたいただきました。

(福留氏) 食事の方は、やはり我々の印象が残りますね。稽古よりも。

(2) 学生の心をつかむには

(福留氏) 私が思うに、吉原先生は、実技で「ああだ、こうだ」と教える方ではないのですね。ムードを盛り上げていつて、「よし、よし。いいぞ、いいぞ」と。「いいねえ」って、みんなを盛り上げて、チームを盛り上げてくれた先輩なのですよ。もちろん、その陰では御自分では一生懸命稽古をされていたと思うのですよ、自分のためには。だけれど、それを押し付けて学生に「こうだ、ああだ」というのはなかったですから。

(瀬戸口) ムードメーカー的な存在ですね。

(齋藤) 今は、褒めて伸ばすという教育が普通ですが、当時としては珍しかったのではないですか？

(福留氏) そうですよ。当時はどこの監督もね、「ビシビシと、もっとやれ、もっとやれ」という感じだったのですけれど。

(松下氏) 税務会計事務所をされていて、経済的にも精神的にも余裕が感じられましたから。よく「栄養会」というのをやっていただきました。

(福留氏) 学生の心をくすぐって、伸ばしてあげるといふタイプではないのですか。今、考えれば。学生はそれに甘えて、調子に乗って頑張ったと思います(笑)。

吉原氏が「栄養会」を催していた様子は、御家族の記憶にも鮮明に残っている。剣道部員と同世代で、当時、千葉大学医学部で剣道部に所属していた吉原俊雄氏は、次のように回想する。

一時期代々木のマンションに住んでいたこともあり（昭和四七（四九年頃）、その後は目黒駅近く（品川区上大崎）に住んでおりました。私は千葉大の方にいることも実家の方に帰ることもあり、代々木と上大崎のマンションによく学生が大勢来られて鍋料理などしていたこと覚えています。母親がいつもビールや食事の準備をしていたことも記憶にあります。皆さん当然ですが元気でよく呑み、よく食べていたこと思い出します。

吉原氏が「栄養会」を催した意図は、松下氏、福留氏が感じている通り、「学生の心をつかむこと」にあった。吉原氏自身が、『剣道日本』（二〇〇四年九月号）で、次のように記している。

昭和四十五年、私は専修大学の監督に推挙された。OBとはいえ、私は剣道の専門的な教育を受けた者でもなければ、学徒出陣による繰り上げ卒業であったため、学生時代に残した実績というものも何一つない。玉利先生に相談を持ちかけたところ、「よっちゃん、ぜひやりなさい。僕は早稲田の監督を長年やっていたけれども、学生の心をつかめば大丈夫です」

とご返答いただいた。私は意を強くして監督を引き受けた。そして、玉利先生の経験談に基づく「学生の心をつかむ方法」も実行した。例えば大会に当たつての心のつかみ方である。前日、私は腹を空かした団体のメンバー九名を家に招いた。山のように盛ったゆで卵に、二つの大鍋を使ったちゃんこ料理。それらを学生たちがペロリとたいらげると、やおら押し入れから

九本の竹刀を取り出すのである。前日までに私が作っておいた竹刀である。喧嘩にならないように抽選で選ばせるわけだが、この竹刀が学生たちに好評だった。（二〇ページ）

玉利嘉章氏とは、前述のとおり東京都剣道連盟の役職を通して知己を得、剣道だけでなく、竹刀作りも習うようになっていた。玉利氏は、吉原氏の戦後の剣道人生に最も大きな影響を与えた人物と言えるよう。

九、吉原家と剣道

御家族から見た吉原晋氏については、二男の吉原俊雄氏が、思い出の記を寄せてくださった。許可を得て、そのままの形で次に紹介する。

―父 吉原 晋 についての思い出―

父吉原晋は千葉県の房総に続く吉原家の一二代目長男ということもあり、かなり大事にされた存在だったようです。本来は次男であったのですが、乳幼児のころの長男が亡くなり、以後実質は長男扱いになったと聞いております。おそらく大正から昭和にかけては家長制度的な雰囲気が残っていたものと思われる。長男としての父の兄弟は弟三人妹一人でしたが、長男（跡継ぎ）として大事にされ、弟は男子のいない他家へ婿入りのような形でもありました。

その感覚が根底にあるのか、二人兄弟の次男である私は、長男である兄よりも自由に育てられたと感じています。学校の成績や進学、職業選択など何か言われた記憶なく本当に自由にさせてもらいました。兄は剣道七段と真面目に剣道にも取り組んでいましたが、私は剣道もほどほどに音楽やその他スポーツも自由にやり、昭和の当時の学生らしく長髪にしましたが、その生活ぶりに対しても注意もされず穏やかでした。

東京、そして千葉でも子供のころより父の剣道の稽古や大会など見る機会は多かったのですが、その際「剣道着の着こなし、打ち方、受け方、全体の立ち姿」をみていて肉親ながらなかなか「格好いいな」といつも思っておりまして。

私が小学校の頃は荻窪の大義塾という道場で稽古をしていました。兄も通っておりましたが、私は見学のみでした。当時塾長の中村藤吉先生から中村太郎先生（神奈川県警、全日本で二回優勝、準優勝も二回されている名剣士）の練習相手になる方が大義塾で少なく、年も近い父を指名してよく稽古をしたと聞かれています。

私が成人してからは、母校医学部剣道部の合宿の際に、専修大学の学生さんを一人伴い、稽古につけに千葉まで来たことがあります。昭和四七年頃に医学部剣道部の道場で皆稽古をつけてもらい、当時医学部四年の部長が、父の教え方にとっても感激していたことを覚えています。

その後、昭和四七年の関東医歯薬獣剣道大会（医学部、歯学部、薬学部、獣医学部合同の剣道大会）では、たまたま父が総審判長を務めておりました。合宿の時に稽古をしたその部長は決勝まで勝ち進みました。決勝前に会場廊下で呼び止められ、父から「君は少し焦って打ちに行く傾向がある。落ち着いてじっくり行けば、君の方が実力は上なので勝てる」というようなアドバイスを送ったのを記憶しています。結果、部長は冷静に試合を選び、個人戦優勝を成し遂げ、医学部剣道部の歴史的快挙でした。父の稽古とアドバイスが全てでは無いはずですが、私も下級生として誇らしく、落ち着かせながら背中を押す一つの教え方だと思いました。学生さんを指導する場合、よく言っていたのが、元立ちをして突いたり倒したり、相手を抑えず、あと一本あと一本と最後の最後まで前へ出させ、打たせる方が良いということでした。大成しなかった私の剣道人生からみていつのまにか、そのような言葉を聞いて、評論家的な立ち位置で父を見ていたような気がします。

孫で唯一の男子であった私の息子は父の晋をとって晋太郎と名付けましたが、よほどうれしかったのか、子供用の防具を何回か買ってもらいました。小学校、中学校と剣道をやり、高校も剣道部だったのですが、怪我のために剣道継続を断念しました。息子は父の剣道着や日本刀をもらっていたこともあるのか最近居合を始めています。やはり孫として何か祖父の思いを継

続したいのではないかと想像しております。

晋次男 吉原俊雄

吉原晋太郎氏も、インタビューの最後に、祖父・晋氏の影響の大きさを語ってくださった。

（齋藤）お孫さんとして、おじい様の存在をどう感じられていますか？ 剣道をなさってこられたことも、最近居合道始められたことも、おじい様の影響でしょうか？

（晋太郎氏）はい。祖父は、時々、東京の私たちの家に立ち寄ることがありました。私たちも盆暮れには夷隅に行っていました。私が幼稚園生から小学校の低学年ぐらいまでは、よく相撲を取ってくれました。あの頃、六〇代後半ということになると思うのですが、体も大きくて腕力も強くて。すごく頼りがいのある祖父だったなという印象です。そして、私は「晋」の字を戴いた「晋太郎」と言いますが、大分可愛がってもらいました。

剣道ということで言うと、小学生の頃から私も剣道をやっていました。日頃から祖父に剣道を習っていたわけではないのですけれども、折に触れて、竹刀の握り方とか、攻めるときの気持ちとか、そういったことを祖父から教えてもらいました。私の従姉妹も二人ともずっと剣道やっていて、四段、五段ぐらいまで取っていたと思います。

（齋藤）では、吉原家では、剣道というのは非常に身近な存在だったのですね。

（晋太郎氏）そうですね。はい。夷隅の祖父の家に行くと、朝、庭で竹刀の素振りをしたものです。すると、祖父が見てくれて、「ちよつとここをこうした方がいい」とか、手ほどきを受けました。

（齋藤）日本刀に興味を持たれて、居合道を始められたのも、おじい様の影響でしょうか？

（晋太郎氏）はい。祖父の家の床の間には日本刀が飾ってありました。こっそり中身を見ていたこともあり、小さい頃から日本刀というものに触れる機会がありました。私の家のそばには、赤穂浪士で有名な泉岳寺がありますけれども、門前のみやげ物屋で、木で作った刀のおもちゃを祖父が買ってくれて、そこに「吉原晋太郎守り刀」と書いてくれました。それは、今でも手元にあります。



写真4 吉原晋氏は書も嗜まれた。写真は、菩提寺の明王院（千葉県いすみ市）に奉納されたもの。（吉原家提供）

居合道は、道場を見学したときに、先生から「吉原晋先生のお孫さんであれば、私が直接教えます」とおつ



写真5 吉原晋氏は居合道も稽古された。写真は、居合に使われていた真剣のうちの一つ。表銘「小島寛造之」、裏銘「昭和五十九年十二月吉日」。刀身は定寸より長く、長身に合わせた2尺5寸。鍔は透かしを入れない鉄地丸型、柄鮫は黒色染め、鞘色は黒呂という豪壮な拵。(吉原家提供)

で人気があつて、みんな列を作つて並んで、掛かり稽古の順番を待っていた」ということです。

しゃつていただいて入門しました。伊藤知治先生という剣道教士八段、居合道教士八段の方ですが、警視庁で濱崎満さんの一級上ぐらいになるんだと思うのですが、昔、剣道の講習会で吉原晋の指導を受けるための列に並んでいたそうです。

その伊藤先生がよくおっしゃるのは、「吉原先生は非常に優しい。竹刀で人を小突くようなこととはしない、大きな剣道をする。非常に優しいの

10. おわりに

以上が、これまでの調査で知ることのできた吉原晋氏の略伝である。

著者は、専修大学の剣道部出身でもなく、また剣道に明るいわけでもない。資料やインタビューに基づく記述を行うことを心掛けた。剣道部関係者の方々には既知の情報も多いことと思うが、本学OBとしての再評価がなされることを期待して稿を閉じたい。

謝辞

調査の過程で、吉原俊雄氏、吉原晋太郎氏は、筆者の度重なる質問に対して、根気強くお付き合いくださり、丁寧に情報をお寄せくださいました。

剣道部OBでもある松本健一氏は、剣道部OBの方々へ紹介の労をとってくださいました。

剣道部OBの松下吉進氏、福留文雄氏は、師走の風の冷たい中、神保町までお運びくださり、長時間にわたってインタビューに応じてくださいました。

剣道部部長の齋藤実氏は、剣道場の写真をご提供くださいました。

末筆となりましたが、皆様に厚く御礼申し上げます。

〔脚注〕

- 1 町長の在任期間は、『夷隅町史 通史編』（二〇〇四年、夷隅町）一〇九一ページに基づいた。
- 2 東京学連剣友連合会<https://gakuren.jp/?p=1651101>一九年一月二日投稿（二〇二四年一月二八日閲覧）。
- 3 斎藤敬基氏は、昭和三九年経済学部卒業。
- 4 村岡裕氏（一九一六～二〇〇三年）は、東京高等師範の出身。剣道範士八段、第六回剣道功労賞（全日本剣道連盟）。日比谷高校定時制主事等を務めた。専修大学剣道部師範には、一九六九年一月に就任。のちに、名誉師範となっている。
- 5 本学が「体育推薦入学試験制度」を他大学に先駆けて導入したのは一九八二年であった。
- 6 濱崎満氏は、昭和四七年商学部卒業。剣道範士八段。卒業後は警視庁に奉職し、剣道主席師範を務め、現在は警視庁剣道名誉師範。本学剣道部の第四代師範でもある。
- 7 恒次勝利氏は、旧姓・森。昭和四七年商学部卒業。本学剣道部の第七代監督も務めた。